

「内科治療マニュアル」

〔編集〕 E. C. Boedeker・J. H. Dauber

〔監訳〕 高久 史麿・和田 攻

杏林大学教授

相 馬 智

最近話題になっている PO (problem-oriented 問題志向型) 形式の診断書は、現在示されている問題への診断的アプローチを教えることにより、従来の疾患記述中心の教科書と実地臨床場面における診断とのギャップの橋渡しの役割を持っている。しかしこの PO 形式のテキストは在来テキストを補充するものでも、post-graduate の教育に際して患者の提出する問題、すなわち症候や所見、異常な検査データから入って診断に至る PO 形式の実用性と、個々の疾患についての詳細な記述からなる従来のテキストの系統性と、この両者をかみ合わせたものが欲しいと願うのは私だけではあるまい。今回本書を読んでこれぞ探しもとめた本であるという感にうたれた。引きずりこまれるように時間を忘れ読み耽った。外科にも高名な Condon, Nyhus の著になる “Manual of Surgical Therapeutics” があるが、同じ専門領域のせい、この本ほどの感激はなかった。日本語のせいかと思ひ原著をとりよせてみた。原著のもつ良さに再び感激したと同時に、翻訳者のきめ細い配慮も同時に感じることができた。これが本書に初めて接した実感である。

序によれば本書はワシントン大学 4 年生の内科手引書であるという。

編集者がチーフレジデントであることも驚きである。本書は 22 章からなるが総頁数 500 でハンディなものである。項目を見るかぎり PO 形式ではなく、従来のテキストと変らない。しかしすべての章において個々の患者に合った治療方針のたて方、各治療法の意義と限界・適応・病態生理学的および薬理学的知識・実際の治療法・薬剤の投与量および投与方法・副作用などいずれも最新の実践的治療法がのべられており、この本一冊あれば診断をし、どのような治療を行えばよい、たちどころに分る仕組みになっている。

外科医にとって有難いことは、発熱、便秘、下痢、皮膚症状など基本的な全身症状に対する実際的な考え方がのべられていることである。引き続き各系統ごとの内科疾患についての概説と治療がのべられている。更に抗生物質と感染症、悪性腫瘍の化学療法の基本的な考え方、選択基準など現在入手できる薬剤について要領よくのべられている。私達外科医が術前患者の合併症としてよく遭遇する、心疾患、高血圧、腎疾患、肺疾患、貧血、糖尿病、肝疾患、甲状腺疾患、出血凝固異常など、すべてどのように考え、どのように処置すべきかがのべられている。心憎いことは手術適応や手術療法にまで言及していることである。内科書で

手術療法の意義まで言及した本は少なくまさに出色である。

新しくつけ加えられたという急性肺不全、胃腸管出血、高脂血症もきわめて新しい概念がもられており、神経学的救急療法は、次章の救急療法と合すると外科の救急外来のマニュアルともいえる。

一貫しているのは、患者をいかに把握し最短距離でいかに有効な治療を行うべきかがのべられていることである。

最後に特筆しなければならないことは、翻訳者が診断判定条件など日米間の差と薬品名の違いを訳註として加えていることである。耳なれた薬品名がでてきて、すぐにでもベットのサイドに應用が可能である。この努力は並大抵のものではない。高久、和田教授をはじめとする訳者に深甚の敬意を払うものである。訳書としては初版本なので 2～3 の誤植が気になるが、版を重ね完璧なものにしていきたいものである。

私自身外科医であるので、外科レジデント、実地診療にたずさわる外科医必携の内科マニュアルとしては是非手元におかれることをお奨めする。診療の際の疑問に対する虎の巻として末長く愛用したい本の一つである。

(A5 変型 頁 538 図 3 1977 年 ¥4,200
〒200 医学書院刊)